

とまこまい びじゅつかん  
苦小牧の美術館の  
みりよく つた  
魅力を伝える

# びとごま

第1号  
2012年11月号



とまこまいしほくぶつかん ちか たらべや  
苦小牧市博物館の地下に、お宝 部屋が  
あるのを知っていますか？そこには、教育  
や研究のために集められたものや、市民か  
ら寄贈（※1）された美術品などが大切に保管  
されています。収蔵庫と呼ばれる、その部屋は第一  
収蔵庫、第二収蔵庫、第三収蔵庫に分かれていて、それ  
ぞれ保管している物が違います。第一収蔵庫には昔の道具が  
ひとつひとつ丁寧に置いてあります。昔のテレビやミシンなど日常  
のものから、珍しい木鉢、下駄スケート靴、炭アイロンなど、全部で  
約五万点あります。第二収蔵庫には、動物のはく製や化石などが約四万  
点あります。はく製とは、死んだ動物の内臓や肉を取り除いて、かわりに綿を  
つめ、生きている姿とそっくりにしたものです。とても薬くさく、よるうごだ  
でもたくさんの種類があり、びっくりしました。第三の収蔵庫には絵画があります。来年できる美術館に飾  
る絵もあります。この部屋は、ほかの収蔵庫と違って、扉が二重になっていて、靴もぬいでからでなくては



## 地下倉庫を探検？！

はい かいが  
入れません。絵画はとてもデリケートで、すごく厳重に  
あつかっているのだなあとお思いました。かいが せんてん  
あり、それぞれが作者と作品名と番号の  
書かれた箱に入っていました。箱に  
入っているので、作品を見ること  
はできませんが、タイトルだ  
けでも興味深く感じました。  
ちか しゅうぞうこ ぜんぶあ  
地下収蔵庫には全部合  
せて十四万点も保管  
されています。

※1 寄贈：市民が自分の持つて  
いる品物を、あるいは美術家自身が  
自分の作品を「教育や研究に役立てて  
ほしい」と博物館や美術館などに贈ること。



# がくげいいん 学芸員って しごと どんなお仕事してるの？

2012年9月29日、苫小牧市博物館で美術担当の学芸員をしている三村さんと細矢さん、坂井さんの3人に学芸員の仕事についてお話を聞きました。

博物館は、苫小牧市美術博物館（仮称※1）に生まれ変わるため、現在工事中で閉まっています。でも学芸員の仕事は休みではありません。来年の開館に向け、展覧会を6つくらい考えています。みんなが楽しめるように、と考えています。寄贈される絵を管理し、こういった品物なのか調査・研究したり、市民に見もらう機会をつくることも、学芸員の仕事です。

たくさんある作品を写真で見てもらえるようにするため、デジタルミュージアムの準備も進めています。完成すれば、作品と作者の名前などの情報を館内の大型モニターで見ることができるようになります。

また、ふだんの博物館の事業については、工事の間、別の場所を借りて続けています。博物館大学講座はアイビーブラザ、土曜体験教室と博物館クラブはサンガーデン研修室が会場です。こういった講座の内容を考えることも学芸員の仕事です。さらに、出前講座や自然観察会、移動美術展など、博物館のそとでの取り組みもあります。苫小牧市博物館には7人の学芸員がいて、それぞれに担当を分けて仕事をしています。

私たちの住む街・苫小牧の自然や歴史、文化を、市民の皆さんによく知ってもらうことが学芸員の大事な仕事です。そのために、苫小牧に関係のある自然(地質、植物、動物など)や歴史(考古、民俗など)、そして芸術に関する資料(もの)を集め、収蔵庫で大切に整理・保管し、次の世代に受け渡します。過去のものや未来のもの土台になるからです。なかでも美術作品はデリケートなので、温度・湿度をきちんと管理できる収蔵庫に厳重に保管しています。物ばかりでなく人についての情報も集めて記録しています。次にこれらの収集したものを、調査研究し、報告書などで市民に提供しています。他にも、講演会や体験教室などの行事を楽しくわかりやすいように工夫して実施しています。また、収蔵品を使った展示会やほかの美術館から作品を借りて絵画展などを開催するのも美術担当の学芸員の仕事です。いつでも、学芸員はみんなに喜んでもらえるような行事や企画展を考えています。

みむら がくげいいん  
三村学芸員より





# アーティストに会いに行こう!

たるまえア-ティ ほうもん  
樽前artyアトリエ訪問

たるまえア-ティ とまこまい かつやく  
樽前artyは苦小牧で活躍するアーティスト  
が集まって 2004年に結成されました。現在  
は、鉄や木を使った立体作品や家具、看板  
などを作る藤沢レオさん、小説を書いている  
千葉和魂さん、グラフィックデザイナーの  
堀米和克さんの三人で活動しています。

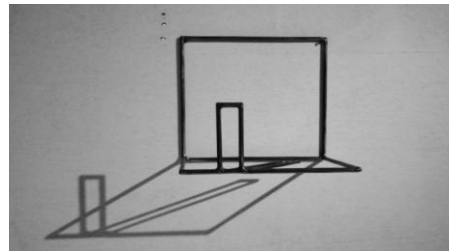
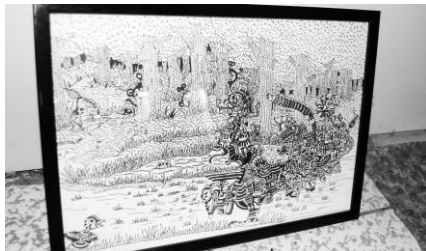


2012年9月1日、樽前にある工房レオを訪ね、樽前  
artyを取材しました。樽前は細長い苦小牧の西の端です。  
樽前に近づくと、だんだん建物の数が少なくなって、緑  
の匂いがしました。「この道であっているのかなあ」と思  
っていたら、『樽前arty』の看板を見つけ、赤い屋根の  
建物にたどり着きました。すごく植物が育っていて、と  
ても静かなところ。そこはもともとは牛舎で、たく  
さんの人に手伝ってもらって今のアトリエになったそう  
です。景色がきれいなこと、藤沢さんが子どもの頃、樽  
前小学校に通っていたことから、樽前で活動していま  
す。ア-ティとは「芸術家気取り」という意味です。三人  
は違うジャンルで仕事をしているので、一緒に展覧会な  
どをすると、アイデアが広がってとても楽しいし、いろ  
んな意見が出てバランスもいいそうです。子どもの頃から  
工作が好きで、その好きな工作のようなことを仕事にで  
きて楽しいという藤沢さんの

作品は、触ってみると、柔らかいものと硬いものがあり、  
鉄で作られたものは重かったです。影も作品の一部  
になっているところが面白い作品もあります。自分の  
作品を見た人が笑顔になってくれるのがうれしいとい  
う堀米さんには、見れば見るほど不思議な気持ちになる  
イラスト作品を見せてもらいました。下書きなしにボール  
ペンだけで、あんなに細かく書き上げるなんてすごい  
と思いました。

藤沢さんに教えてもらって、私たちも鉄の作品づ  
くり挑戦しました。直径8mmの太さの鉄の棒  
を熱してハンマーで叩いてペチャンコにして、もう  
一度熱してひねると、ねじれた形ができます。これ  
をカットしてキーホルダーにしました。鉄は、熱すると  
赤く柔らかくなり、冷えると硬くなりました。「鉄  
の変わる様子が面白かった」と亀井記者、浜記者は  
「火花が怖い」と感じました。





藤沢さんの作品は若草小の正面玄関のオブジェ、豊川町の『お月さまのたね』の看板や家具、錦岡の『フルール・プラン』中庭のオブジェなど、堀米さんの作品は王子イーグルスのポスター、『ダンディライオン』のメニュー表など、藤沢さんと堀米

さんがコラボして『トランク』の看板もあり、市内のあちらこちらで見ることができます。また、千葉さんの作品は市内の書店や札幌の喫茶店で購入することができます。樽前artyの文芸論評誌『PONARTY』に掲載されています。

いつもは博物館や文化公園といった展示・発表の場で取材を行ってきた記者たちですが、今回は藤沢レオとして樽前artyの創作活動の拠点であるアトリエを訪れて取材してくれました。苦小牧に住む記者たちも同じ市内の樽前を訪れるのは初めてという人がほとんどのようでした。いつもと違う非日常的な環境で刺激を受けたのか、樽前artyのメンバーそれぞれに作品づくりに関する色々な質問をしたり、作品に触ったり角度を変えて見たり、アトリエの周囲を走りまわって写真を撮ったりと、活発に取材してくれました。この取材を通じて私たち樽前artyがどんな創作活動をしているか少しはわかってもらえたかなと思います。(和魂)

「びとこまと一緒に作っているartyが、今回は取材される側でした。どんな質問をされるんだろう、artyをどう思っているんだろうと期待と不安に心躍らせながら当日を迎えました。取材場所がいつもと違うからか最初は、なかなか質問が出ず、ドキドキでしたが、私たちから活動の様子や作品の説明をすると、だんだん興味が湧いてきたようでした。自分が作った作品にも興味を持ってもらってホッとし、おもしろい感想や予想外のリアクションなどが聞けて新たな意欲をもらいました。今回に限らず、このような交流ができればと改めて感じました。

記者のみんな、ありがとう、お疲れさまでした。(堀米)

たるまえ アーティ  
樽前artyより



『びとこま』が  
できるまで  
～大人記者の目から～

「恋する瞬間を見てしまった！」そんな風に思いました。暑い暑い夏の日、文化公園アートフェスティバルの取材でのことでした。暑さも何のその、はしゃぎ回って走り回って、子どもたちは取材しまくっていました。芝生の上で演じるジャンベ演奏者の茂呂さんと舞踏家のキックさんを取材しようと、子どもたちを誘ったものの…キックさんは長身を民族衣装で包み、坊主頭で、大きな足はむき出して、もしも街を通りすぎたなら目を合わせたくないな～といった、なんだか怪しげな風貌。怖いかも？という私の心配も知らず、夏の空気を震わせ地面からもドコドコと伝わるジャンベの演奏に合わせたキックさんのダンスに子どもたちは一瞬にして魅せられ虜に。まるで、ずっと前から慕っていたかのように、子ども達はキックさんの手を取り、抱きつき、一緒に踊り、気づかぬ記者達も演者の一員になっていたのです。子ども達と取材をしているとアートの不思議な力を目のあたりにします。私の何よりの楽しみです。(おこ)

製作：美術館広報部  
取材：阿部天翔、阿部萌夏、荒井楓、荒井聖、伊藤なつみ、菊池りの、  
亀卦川菜、熊谷理菜、佐々木健人、佐藤かりん、千葉心美、  
浜明日美、本村朱里、的場翔、望月王翔、山本真羽  
編集：小河 けい  
発行：苦小牧市博物館  
(お問合せ) 〒053-0011 苦小牧市末広町3丁目9番7号  
tel 0144(35)2550 fax 0144(34)0408  
HP www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutukan/  
e-mail hakubutukan@city.tomakomai.hokkaido.jp

(▽) 協力のお願い (▽)

「美術館広報部」の記者であることを証明するカードを提示された方は、取材へのご協力をお願いします。疑問点や確認等が必要となる場合、博物館までご連絡をお願いします。

『びとこま』第三号はいかがでしたか？  
感想などメッセージをお待ちしています♪